



# 木 木 木

千葉県 TEACCH プログラム研究会  
2019年5月11日 第101号

「森」字・佐々木正美  
イラスト・竹蓋伸六

発行：千葉県 TEACCH プログラム研究会広報部  
事務局：千葉県発達障害者支援センターCAS内 TEL 043-227-8557  
ホームページ：<http://www5e.biglobe.ne.jp/~teacch/site17.htm>

## 新しい時代「令和」にさらなる期待を込めて

千葉県 TEACCH プログラム 代表 西村 則子

「平成」から「令和」の時代になり、より生活しやすい社会になってほしいと願っている人は多いことと思います。平成の時代、自閉症をはじめとする発達障害の人たちへの関心は高まり、国の制度や千葉県の施策が整ってきました。特別支援教育も始まり、一人一人のニーズに応じた教育が行われるようになってきました。しかし、実生活の中での自閉症の人たちの困り感や生きにくさは、どれだけ軽減されてきているのでしょうか？障害者差別解消法が施行されても、どれだけ適切な合理的配慮が行われているのでしょうか？社会全体はもちろんのこと、教育や福祉の現場でも、一人一人に応じた支援をどのようにすればいいのか、まだ手探りの状態のことでもあるのではないのでしょうか？

特殊教育から特別支援教育に変わろうとしている頃、個別の支援計画を立てて、教育・福祉・医療が連携し、障害のある方たちを生涯に渡って支援を引き継いでいくことが提言されました。それからすでに15年以上がたっていますが、一人一人に応じた支援を行うことや支援を引き継ぐことの難しさは今も続いているように思います。どのライフステージにおいても、自閉症にかかわるすべての人が、障害の特性を理解していかなければいけないのですが、それが難しい現実があるように思います。「令和」の時代には、社会全体の理解が進み、どの人もその人らしく生きていけるようになって欲しいと願っています。そのためにも、支援者が適切にかかわることができるように、その育成を継続的に行っていくことが必要です。

千葉県 TEACCH プログラム研究会は、今年度で18年目を迎えました。発足当時から、千葉県の福祉行政と教育行政のご理解とご支援をいただきながら、保護者・福祉施設職員・学校職員等の『協働』により運営してきました。『協働』こそ、TEACCHの理念です。「多くの人々が自閉症のことを理解して、適切な支援を行ってほしい、自閉症の人がその人らしく幸せに暮らせるようになってほしい」という強い思いを持ち、運営スタッフ一同はボランティアワークで本研究会を支えています。

今年度も千葉県 TEACCH プログラム研究会では、全国的に著名な講師をお招きしてセミナーを行います。自閉症にかかわる人たちの適切な支援のために、また、支援者の育成を計画している組織に対し、いつでも役に立てられる内容になっています。研修会に参加することにより、自閉症への理解が深まり、具体的な支援方法を学べ、明日からの支援への意欲もわいてきます。今年度も多くの皆さまと一緒に学びたいと思います。ご参加をお待ちしております。

# 第6回連続セミナー報告

平成31年2月24日（日）千葉県教育会館にて実践報告会が行われました。今回の実践報告は、家庭、教育、福祉の実践を発表していただきました。違った立場からそれぞれ実際に行ってきた支援や課題など成功例や失敗談などを交えて具体的な話を聞くことができました。参加された方々も現場の生の声を聞き、現状を知ることによって自閉症スペクトラムの方への理解が深まったと思います。

是非参考にさせていただき、日々の支援に役立てていただけたらと思います。

## 実践報告その1

### 『家庭における実践報告』

東総地区自閉症協会 石井 清氏

佳代子氏



#### 【本人を取り巻く石井家の人々】

本人が生まれてからご両親や姉2人との家族の関係やこれまでの軌跡様々な葛藤の中で、家族全員が良き理解者となり本人を支えている状況  
自閉症診断から母はすぐに行動（自閉症協会入会、TEACCHと出会いすぐにラミネート購入、視覚支援を試行錯誤しながら実践そして継続中）  
現在姉2人は、特別支援学校の教員、作業療法士として発達支援センターに勤務

→障がいとは一生のお付き合い、自分が変われる、周りも変えていける。

#### 【特別支援学校でできるようになったこと】

療育手帳取得で保育士増員など保育所で受けた支援のつながりから特別支援学校に入学したいきさつ

特別支援学校のスケジュール管理やできることが増えたことに感動！

（箸、アイロン、ミシンなど様々な道具の使用など）

→適切な支援があればできるようになる。

#### 【スムーズな生活のために】

学校卒業後の生活への不安、母、町長に直談判、自閉症協会の力添え  
通所施設開設、進路決定まで

→一人の力では難しいが多くの人と力を合わせれば可能になる！

本人の特性への支援（実物の理解がある、1ヶ月の予定を工夫等）

パターンを崩すための工夫（自分のこだわりではなく行動の切り替えをスムーズにできるように行った父の実践、外出先の違いを知らせるバッグや服薬専用スプーンなどお助けグッズ）

→本人の安心のためにタイミングが最重要！、お助けグッズは必要である。

## 実践報告その2

### 『船橋市立船橋特別支援学校小学部の実践 ～自立活動の指導のと理組について～』

小学部教諭 小金井 紀子氏



#### 【自立活動の指導について】

千葉県内で一番児童数が多い学校。学校教育全体での取り組みと時間における取り組みを実施（毎日午前中 25 分間実施）

小学部の目標「自分のことは自分でしよう」を受け、自立課題を取り入れる個別の学習では、1対1、複数対1で抽出して個々のスキル向上学習を実施  
→言葉かけや手助けがなくても「自分から最後まで取り組む課題」として自立課題に取り組む。

#### 【自立活動の指導の課題】

特別支援教育経験の浅い教員が多数

個別の指導計画や個々に応じた教材作成に苦慮

実態把握の指標不足

→外部人材の活用 学部研修、自主研修の実施により資質向上を目指す！

#### 【実践を通して】

スペシャリストの講師より児童にどのような課題を作成したらよいのか実際に作成しながら助言をもらう。STや心理士などスペシャリストに相談できる雰囲気になっている。わかりやすい環境設定や児童に合った教材を準備することの大切さを学んだ。

→実態把握（言葉理解、数理解等）、年齢考慮、道具の工夫（使いやすい文具等）わかりやすい設定、興味関心、生活に結びついているかを確認することが大切である。

## 実践報告その3

### 『入所施設での実践報告 施設内研修から取り入れたこと』



社会福祉法人いちょうの里みずほ学園支援員 江澤 尚行氏

#### 【研修の流れ】

成人施設における園内研修（講師助言年 12 回）、事例者への支援の評価

- ① 動画より事例者のプロフィール説明
- ② 構造化されていない状況での課題実施
- ③ 構造化して課題実施
- ④ ディスカッションして再構造化（③と④を繰り返していく）

→動画を見ることで行動を細分化し支援状況を振り返ることができる。

#### 【構造化による支援の変化】

洗濯物たたみの活動を 3回再構造化したことで「自分でエプロンをたためるようになる」という課題を達成できた。今後は、自立課題の時間（1時間）に洗濯物をたたむ活動をしてもらう。次の課題は、「洗濯機から洗濯物を取り出す」手順を加える。

(千葉県 TEACCH プログラム研究会 ディレクター)

# 安倍陽子先生のティータイム



美しい新緑と五月のピンクや赤の花とブルーの空が調和する季節になりました。

皆様、平成から令和へ、新しい時代をどのように迎えられましたか？

今年は、記念すべき新しい時代と共に千葉の TEACCH 研究会が発足してちょうど 18 年目の年を迎えます。私は、職場は横浜市なのですが、千葉県に住んでいることもあり、今回講演をいただく千葉県自閉症協会会長の大屋滋氏からお誘いを受け、T 研立ち上げ前の準備の年から、関わらせていただいています。新しい会員の方たちも、どうぞ、よろしくお願い致します。これまでの平成の時代を振り返ると、私たちの T 研は、故佐々木先生をはじめとした講師の方々や会員の皆様、本当に多くの方たちのご協力やスタッフの地道な努力に支えられ、新しい時代を迎えられました。感謝の気持ちで一杯です。

T 研での忘れられない平成の思い出としては、2002 年 6 月、千葉の T 研の初めての総会で漫画家の故戸部けいこさんが、講演をつとめて下さいました。それまで、視覚的支援や聞きなれない構造化という言葉にも抵抗を感じられた方が多くいらしたかと思いますが、戸部さんは、「光とともに…～自閉症児を抱えて～」の漫画を描くことで、光君の成長、子どもに合わせた具体的な支援、家族の葛藤と喜び、そして幸せとは何かを私たちに教えて下さいました。

平成から令和の時代へ、何が大きく変化したのでしょうか？一つには、アナログからデジタルの時代へ、そして AI の時代へ。特にこの 10 年の間に通信形態や映像関係が大きく進歩し身近なものになりました。多くの方々がスマホを携帯し、簡単に映像をとり、SNS につなぐという日々になりましたね。私たちが子どもを育てる生活環境や福祉的なサービスの変化と共に、ASD (自閉スペクトラム症) 支援は、様々な変化の後押しもあり、変わってきています。視覚的支援やスケジュール、タイムタイマー、イヤーマフなどはより馴染みのある物となりましたが、ASD のその子どもや大人に合うように支援の個別性が大切です。

さて、今年度も T 研は、5 回の講演会と実践発表会を行います。前半 2 回は基礎編として、ASD の人たちの特性理解と支援、及び TEACCH プログラムについて、繰り返し理解を深めていきましょう。今回の大屋氏からは ASD の特性理解を父親として、門先生からは表出性コミュニケーションの PECS を中心にお話をうかがいます。後半、秋から始まる 3 回は、実践・応用編になります。ソルト氏からは ASD の当事者としてメッセージを、10 月には学校の実践として京都の支援学校にこの 3 月まで勤務されていた野畑先生から、成人の支援として横浜市発達障害者支援センターの米澤氏を迎え、実践例をお話いただきます。米澤氏は TEACCH に短期留学をされており、現地のお話もうかがえるかと思えます。来年 2 月の再終回には、講演を聴いた方々から実践発表を募り、お互いに学びたいと思えます。

また、実践セミナーとして、6 月には、TEACCH の評価ツールを学ぶために、引き続き青年・成人向け TTAP 講習を中山清司氏にお願いしています。

令和元年度、多くの方々に多彩なプログラムから新たに学び、日々の生活の中で、ASD 理解と支援にお役立ていただければ幸いに思います。皆様、どうぞよろしくお願い致します。

## ～令和元年度 TEACCH プログラム研究会 第 2 回セミナーのお知らせ～

期日：7 月 20 日 (土) 13:30～16:30 (13:00 受付開始)

場所：千葉県教育会館 新館 5 階 501 会議室 (千葉市中央区中央 4-13-10)

演題：『視覚的なコミュニケーション支援—PECS による自発的表出—』(仮題)

講師：門 眞一郎氏 (フリーランス児童精神科医)

編集後記：令和と改元され気持ちも新たになった今日この頃、「自分にできることは何か」を探究していきたいと思っています。私は生徒達に「職場では、自分のできることやできないことをはっきり伝えて」と言っていますが、できる・できないの判断はどうつけるのでしょうか。「やってみないとわからない」や「できるかわからないけど挑戦したい」、「できるかもしれないけれど不安だからできない」など迷います。改めて考えると、「一人で考えず相談することが大切だなあ」と思いました。やはりコミュニケーション！(吉村奈津江)